

奨励

愛を身に着ける

奨励	大澤 宣【おおざわ・ひろむ】
奨励者紹介	日本キリスト教団紫野教会牧師

あなたがたは神に選ばれ、聖なる者とされ、愛されているのですから、憐れみの心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、責めるべきことがあっても、赦し合いなさい。主があなたがたを赦してくださいように、あなたがたも同じようにしなさい。これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです。また、キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです。いつも感謝していなさい。キリストの言葉があなたがたの内に豊かに宿るようにしなさい。知恵を尽くして互いに教え、諭し合い、詩編と賛歌と霊的な歌により、感謝して心から神をほめたたえなさい。そして、何を話すにせよ、行うにせよ、すべてを主イエスの名によって行い、イエスによって、父である神に感謝しなさい。

(コロサイの信徒への手紙 3章12―17節)

ワクワクする出会い

神戸女学院大学の教授を勤められた内田樹さんという、大学はすでにひかれて、今は合気道の師範をしておられる方が、いらっしゃいます。この方が『最終講義』という本のなかで、こういうことを語っておられます。内田さんは、神戸女学院が、1875(明治8)年、アメリカン・ボードから派遣された2人の宣教師、ライザ・タルカットとジュリア・ダッドレーによって作られたことに触れています。最初の生徒は7人だったそうです。内田さんはその話を聞いて、「その最初に入った7人の女の子たちは何を考えていたのだろう」といつも思われるそうです。一番最初に、海のものとも山のものともつかない小さな学校に通いたいと言った7人の少女たちは、一体何に引きつけられたのだろうかということを考えているそうです。これは内田さんの想像ですが、間違いなく「なんだかよくわからないけれど、あの学校へ行きたい」と感じたのだろうということです。お父さんの袖を引っ張って、「お父さん、山本通りにできた、アメリカ人の女の人がオルガンを弾いている学校に行きたいのですけど」と言うと、「あ、おまえがそうしたいなら、そうしなさい」という気楽なお父さんたちが何人かいて、そういう人たちのおかげで初期の学生たちが集まってきた。それからどんどん集まってきた。何を習っているのかわからないけれど、楽しそうに通っている。スキップしながら通っている。ワクワク感のようなものがあって、その学生たちの「楽しそうオーラ」を感じた小さな女の子たちが、私も大きくなったら女学院に行きたいと思うようになってきた。内田さんは、そういうふう想像されるということです。何をしているかわからない学校でも、そこに集まった子どもたちが何か輝いている。それが大切だということです。そして、内田さんは、「ミッションスクールはミッションの旗印を明確にして欲しい」と語られたのです。タルカットとダッドレーという宣教師の働き、そこに集まった7人の生徒たちのワクワク感、そういったものが、一つの学校を作ったということなのかと思います。

同様のことは、初期の同志社、同志社英学校についても言えることかと思えます。1875年に、同志社英学校が開校したときの生徒は8人、教員は2名だったということです。その翌年、熊本洋学校の閉鎖に伴って、熊本バンドの人たち約35名が転校してきたというのでした。一番最初に入学した8人は、何を考えていたのだろうということです。やはり、新島襄が始めた英学校に、なんとも言えないワクワク感を感じて、スキップしながら来たかどうかはわかりませんが、何か引きつけられるものがあつたのだと思います。

いつの時代にも、魅力ある学校であること、また、私たちとしては、魅力ある教会であることを大切にしていきたいものです。タルカットとダッドレーのような宣教師の働き、そして、新島襄の働きがあって、日本にキリスト教が根付くようになったのです。私たちもまた、語り、教え、伝えていけることができるのであります。神戸女学院や同志社の最初の生徒たちのように、私たちは福音の良い知らせを受けて、本当に喜んでるのか、ということをお考えください。

もちろん、私たちは喜びときばかりではありません。つらいときがあり、悲しみのときがあります。しかし、つらさを覚えるときも、また、悲しみを覚えるときも、なおそれぞれの歩みのなかで、また信仰の交わりのなかで、支えられ、生かされているものであることを覚えていきたいと思えます。

幸か不幸か、日本の教会に集う人は人口の1%、少数です。それは、誰も強制されたり、世間のしがらみがあって、嫌だけれど教会に来ているわけではないということではないかと思えます。

学校の礼拝やチャペルの時間というのは、多くのところが半ば強制のようなところがあるかもしれませんが、同志社大学の場合は全く自由ですから、嫌な人は来ないと思えます。今日もこうして集まっている。実に自発的な思いを与えられ、まことに福音に生かされている私たちです。これはすばらしい信仰の交わりなのです。この信仰の交わりを大切にしながら、共に喜び合い、共につらさを思い合い、共に悲しみを分かち合いたいと思えます。そして、この交わりの豊かさを伝えていくものでありたいと思えます。

愛は、すべてを完成させる

お読みいただきました聖書の箇所は「これらすべてに加えて、愛を身に着けなさい。愛は、すべてを完成させるきずなです」と語ります。パウロがコロサイにある教会の人たちに宛てて書いたとされている手紙です。実際に、パウロが、この手紙を最初から最後まで書いたとは考えられないという意見が多数あります。コロサイとは、現在のトルコの南西部にあった町です。ここには、もともと住んでいたフリギア人と呼ばれる人たちが、紀元前にバビロンから移住させられたコダヤ人たちが、後に移り住んできたギリシア人というさまざまな人たちが住んでおりました。この手紙が書かれた新約聖書の時代、紀元1世紀頃には、さまざまな文化、宗教が混ざり合った、国際的な町であったようです。当然、さまざまな価値観が入り交じった世界であったことと思えます。そのなかにはむなしだまし事と言われるようなものもあって、そういうものにとらわれなくて、自由であるようにと書かれています。そして、イエス・キリストの十字架の死によって、この世に和解の業を成し遂げられたこと、その死によって、イエスを信じるものがこの世にあって自由に生きよう招かれているということが語られております。

私たちは、キリストを通して神様との平和へと招かれ、そして、平和を作り出すためにこの世の中に生かされている。そのことを証していくものでありたいと思えます。

愛は具体的なもの

「愛は、すべてを完成させるきずなです」と語られました。

昨年の東日本大震災以来、「きずな」という言葉をよく聞くようになりました。困難な現実、みんなが協力して取り組んでいこうという呼びかけだと思えます。大きなところでは、復興は進んでいるのかもしれませんが、取り残されていく人たちもいるのではないかと思います。

ある外国人被災者支援の取り組みを紹介する文章を読みました。東日本大震災の被災地には、韓国・中国・フィリピン・台湾・ベトナム・ボリビア、さまざまなところから来られた方たちが暮らしておられます。震災の被害で生活基盤を失ってしまったという事においては、日本人も外国人も同じなのですが、話を聞いていると、外国人の方たちは、誰もが、言葉が理解できなかったことによる恐怖と不安を感じてこられたということです。早口で繰り返される緊急避難を呼びかけるアナウンスが聞き取れない、言葉そのものがわからない。「大津波が来ます。至急高台に避難してください」。これが「とても高い波が来ます。大急ぎで高いところに逃げてください」だったら分かったのに、ということです。その場面では、どれほどの恐怖を感じたことかと思えます。

また、避難所に貼り出された、家族の安否や物資の受け取り場所が書かれた、漢字がいついばいばい掲示物も読めませんでした。「言葉の壁」が「心の壁」になっていたということです。

復興が進んでいくなかでも、日本語の読み書きができないために、仕事を探ることが非常に困難になっているという現実もあります。そのため、フィリピンの人たちが日本語を学べるようにという取り組みを進めているということでした。

イエス・キリストの十字架の恵みによって自由に生きることへと招かれた人は、抽象的な考えのなかにとどまるのではなく、イエスがこの世にまことの人として生きられたことを心に刻みながら、それぞれが現実の生活のなかで、愛をもって生きること、愛を具体的なものとしていくことを大切にすること、導かれているのだと思えます。愛とは抽象的なものではなく、それは目の前の人と向き合い、そこに平和があるということです。平和とは、自分一人が平安な気持ちで満足しているということではありません。自分が触れ合っている人との関係が平安であり、互いに満たされているということであるのだと思えます。

現実には、大変な人のおられることを覚えながらも、直にその人を助けることができないことがあるかもしれません。それが遠いところであったり、あるいは近くであったとしても、一体私に何ができるのかと思うことがあります。また、自分の身近な人のことであっても、病気の痛み、体の痛みというようなこと、生活の大変さ、悲しみや悩みということ、本当には助けることができない、分けることができないということを感じさせられます。そして、その大変さが分からない、私にどうすることができるのかも分からないという思いがします。簡単に、「頑張ってください」というようなことは言えないと思っています。

愛を身に着けたものとして

これも震災以来「頑張れ」「頑張ろう」という言葉があふれていることを思えます。

私は、頑張れ、頑張るという言葉は、あまり使わないようにしたいと思っています。しかし、無神経に頑張れ頑張れと声をかけていたこともありました。

ずいぶん前のことですが、入院しておられる方をお訪ねしまして、その方は大変重い病状でいらっしゃいました。病気の痛み、薬の強い副作用に苦しみながら、その方はベッドで息も絶え絶えになっておられました。私はその横で、しっかりしてください、頑張ってくださいと声をかけておりました。しばらくしてその方は、「先生、頑張れと言われてもどう頑張ったらいんですか」と小さな声で言われました。私は、次の言葉が出なくなってしまいました。自分で頑張ろうと思って頑張れる人もいます。人から頑張れと言われて心地よく感じる人もいます。けれども、頑張ろうにも何をどう頑張ったらよいのか分からないこともあるかもしれません。頑張れ頑張れと言われて、ますます落ち込んでいくこともあるかもしれません。そのように考えますと、頑張れというような言葉は簡単に口にできない言葉であると思います。そして、その時なおさら、私は、大変な人のおられることを思いながら、何ができるのだろうか、何もできないという思いにさせられていきます。しかし、何もできなかったとしても、それでも心に覚えていく、それでも祈っていくということを大切にしたいと思います。

愛とは抽象的なものではありません。人の世の現実には、多くの困難があり、悲しみがあり、傷つけられるようなことがある。そのなかに、すべてを完成させるきずなが示されています。イエス・キリストがご自身を十字架にささげられた、その歩みをもって、この愛を私たちに与えてくださったことを覚え、私たち自身の現実の生活のなかで、主の愛を身に着けたものとして歩むことができますように、導きを祈ってまいりたいと思います。

2012年6月27日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録